

3世代が繋ぐ、背広の浪漫 ツキムラ物語

奈良の町で、親から子へと繋いでいった「洋服店」。そのタスキを受け取った現社長 岸伸彦氏の記憶と共にツキムラの軌跡、そしてこれからご紹介していくコーナーです。



岸社長

PRODUCED BY TUKIMURA

ツキムラの歩み

時代背景

1925年	月村洋服店創業	東京放送局(現NHK)がラジオの試験放送を開始
1950年	2代目岸馨就任	手塚治虫の「ジャングル大帝レオ」が連載開始
1957年	岸伸彦誕生	ソ連で世界初の人口衛星打ち上げ
1958年	日本国有指定商人に認証 ※国鉄奈良駅(JR奈良駅)付近に移転	皇太子(平成の天皇)と正田美智子さんの婚約が発表
1966年	奈良県初の共同展示会を 近鉄奈良駅前にて開催	ビートルズが来日、武道館でライブ
1972年	2代目岸馨が病床のため、 母 保美(現会長)が代表代理	浅間山荘事件 アメリカより沖縄返還



1952年頃 奈良町

上の写真は、1952年頃の奈良町、岸社長の父親、先代岸馨氏。下の現在の写真と見比べても、街の面影が色濃く残っている。



現在

戦後の復興景気に沸く昭和32(1957)年、岸伸彦氏が産声を上げた。幼い頃、父と共に車で顧客回りをした遠い記憶は、今も鮮明に残っている。助手席に座る岸少年に「お前が運転するようになった頃にはエアカーになつていて、空中を飛んでるかも知れない。今は前後左右を注意すればいいけれど、上も下も注意しなきゃいけないぞ」と、未来を想像して笑い合っていた。「父親はこのようなことを言っていた。いつも夢を与えてくれた。僕が子どもだった1960年代は、高度経済成長期という時代背景の後押しもあったかも知れないけれど、いつも夢があった」と振り返る。そんなある日、顧客

1960年代の 夢がある時代に育った ラジオが好きな少年

回りの道中、ふたりの乗った車があぜ道を脱輪してしまう。携帯もない時代、周囲の住人に協力してもらい車を無事に引き上げるのに、何時間かかっただろうか。暮れゆく秋の空に、寒さと不安を募らせる岸少年の手を、父はそっと自分の背広のポケットに入れ、歌を歌ってくれた。その優しさと余裕。そんな父の背広姿に抱いた憧れと、ポケットから出した手に残っていたタバコと父の匂いは、大切な思い出として残っているといふ。

奈良教育大学付属小学校に通っていた少年時代。まだ親の職業が名簿に載っていた時代、医師、教授、議員という職業が並ぶなか、岸氏の欄には「洋服商」と書いてあった。「学級で商売をやっている家は僕ともつとりだけ。子ども心に何か恥ずかしくてね」。



1945年頃先代社長

そんな小学生時代の思い出は、4、5年生のときに学級文集の作文が表彰されたこと。タイトルは「小さな服屋」。洋服の展示会の手伝いをしていたとき、初めてお客さんにハギレを売った喜びを作文にしたものだった。賞状を手にした少年は、喜び勇んで家に帰り、両親に伝えた。両親は作文を何度も読み返し、たいそう喜んでくれたのだ。

現在、岸氏は「ならどっとFM」や「KBS京都」など、ラジオ番組に多数出演している。ラジオ出演にこだわる理由は、その頃にあった。テレビが普及し始めていたが、娯楽の中心はラジオだった。試行錯誤して自分で作ったゲルマニウムラジオ。初めての聴こえてくるNHKの番組……。その感動は深く心に残り、今でもラジオに対して特別な想い入れがある。それが、ラジオ番組に出演している根幹なのだ。「ラジオ出演の際、誰に向かって話しているのかを聞かれたことがあった。考えてみると、楽しみに聴いていた子ども頃の僕へ、ラジオを通じて話しかけていることに気づいたんです」と岸氏。

多感な中学生時代は、アマチュア無線に夢中になった。自分が操った機械から、電波に乗って遠くに繋がる感覚。「勉強は全体の中の下。学校が楽しくなかったから、現実逃避だったんでしょうね」と思春期を振り返る。

そして、高校への進路を決める頃、父親が病に倒れてしまふ。

それまで考えたことがなかった「洋服店を継ぐ」ということが、岸少年に現実となったのはこの時だった。

(次号へ続く…)